

## 地下足袋と

## ジョニーウオーカー

太田 実

日高本線の終点近く、浦河、樺似間の小さな駅に列車は夜遅く着いた。

駅舎の反対側は海で、微かな波の音が聞こえた。星はたぐさん出ていたが、酔いを引き摺る体に空気は重く感ぜられた。塩気を含んだ海の微風が纏わりつくようだ。

ドアが開ると、二輛編成の気動車はエンジンの回転をあげた。排気ガスが勢よく吹き出され、列車は海岸線に沿ってゆるいカーブを描きながら速度を増した。やがて、盛りを過ぎた夏草の陰に列車は隠れ、規則的な振動音だけが遠くいつまでも残った。

駅に降りたのは我々二人だけだった。それがこの列車の最後の客でもあった。見捨てられたような小さな駅だ。駅前に国道が走っているのだが、この時間、通り過ぎる車は稀だった。南下すれば、日高山脈の脊梁が海へと没する襟裳岬、更に黄金道路を経て十勝の国へと至る主要幹線道だ。あまりの悪条件のため、道路に金を敷きつめるほど多額の費用をつぎ込んだという。それが黄金道路の由来なのだが、今も夜走るには難所であるのかもしれない。

少し離れた所に小さなガソリンスタンドが見えた。白熱電球の外灯が一つ淋しく点っている。それがこの駅から見える人工の灯りのすべてであった。

三坪ほどの待合室に入り、造りつけの頑丈なベンチにザックを下ろした。

「よく飲んだな」

煙草を探りながらケンが云う。

「そしてよく寝た」と、僕。

列車を待つ間、札幌の食堂でけっこうな量を飲み、乗車してからもウイスキーを半分空けた。どのあたりで寝込んだのかよく覚えていない。乗りすごさずによく目をさましたものである。

「ローソク点けようよ」

灯りが点くと武骨な造りの駅舎が、何だか懐かしいものに見える。

「ちよつとした山小屋みたいですね」

「空沼小屋か、奥手稲、そんなところかな」

ケンはワングルの四年目、夏の合宿が終わり、もうOB待遇だった。現役時代密かに心に温めていて果たせなかつた。

た山行を、組織から自由になった今、少しづつやつつけていこうとしているのだ。未熟な僕を誘ってくれたのは、たぶん同じ寮に居るよしみから、そして、いくらかは僕の実力を評価してくれたのかもしれない。

何度かケンに連れられて近郊の山に登っているが、今回のような大掛かりなものは初めてだった。

「もうちよつと飲もうよ」

いくらでも入るケンが提案した。

「いいけど、もう山で飲む分まで手をつけていますよ」

「どこかで手に入れるさ」

早くもザックを掻き回してアルコール入りのポリタンを探している。

「シロー、水汲んでこいよ」

水筒を持って表に出た。寶石箱をぶちまけた——ありふれた云い方だが、きつとそう云うしかないだろう。札幌では見ることのできない星の数だった。

駅舎のまわりに水道は見当たらなかった。ガソリンスタンドで水を汲み、待合室へ戻ると、二つのカップにウイスキーが注がれ、チーズの塊まで添えてある。

「よくこんなものありましたねえ」

「俺が非常食のつもりで持ってたやつ。徴がはえてたから、今削り取ったところだ」

「いいんですか、手をつけちゃって」

「こんな風にして、前も着にして半分食べちゃったから。それに非常食にしては重すぎる」

雑炊の具にするつもりで、玉ネギ一個を持っていくまいか、真剣に考えて、やっぱり置いてきた。テントさえ置いていこうと云いだしたケンだった。

「雨が降ったらどうするんです」

「鈍一丁あれば簡単に小舎掛けできるさ。アイヌの人はずっとそうしてきたんだ」

不慣れた僕が相手では小舎掛けにも時間がかかる。結局行動時間が削られることになる。そこで天幕だけは持って、重量のある支柱は現地調達ということで話が落ち着いた。

食料も、装備も、必要最低限のものしか持たない。朝と昼は行動食と称して、クズビスケットかパン。近くの菓子問屋でキロ単位で売っている代物だ。

コンロを使えば時間も燃料も浪費することになる。だから火を使つての炊事は夕食だけに限られていた。それも雑炊。つまり、一回火を炊けばそれで主食もおかずも、そしてスープまでが出来上がる。しかも、コッヘル(鍋)も一つあれば十分だ。燃料と時間の節約、更に装備の軽量化を図るため、長年の試行錯誤の末編み出された生活の知恵であった。「鈍一コと、いくらかの米と塩を持って、あつちの沢からこつちの沢、のんびりイワナなどを釣りながら、昔のアイヌのように、そんな身軽な山旅をやってみようよ」

ケンの理想であった。

「そして、アイヌもすこいけど、ヒグマやキツネ、あいつらは本当にすこい。だって、非常食なんか持たずに毎日非

常を生きているんだぜ。俺達は絶対あいつらに勝つことはできない」

一年以上もザックにしのばせていたというチーズは固かった。アルミのカップから生のウイスキーを口に含み、汲んできた水筒から直に水を回し飲んだ。舌の上で玉をつくり、そのままコロリと胃に落ちていく。うまい水だ。

「もったいないからローソク消そうか」  
吹き消すとバラフィンの匂いが鼻をつく。

海側のガラスがカタカタと鳴った。いくらか風がでてきたのかも知れない。青白く月明かりが射し込み、まごつくほどの暗さではなかった。

「今度で何度目だ」

「五、六回」

「そうじゃない。沢登りだよ」

「二回目」

「二回目で日高の沢に入るというのも異常だな。死ぬかもしれない」

「だって、ケンは大丈夫だって……」

「つい、そう云ったけれど、本当は今回のこれは、まだどこにも記録が残っていないんだ」

「という」と

「一昨年あたり、北海道電力だかのパーティが初めてこの沢を詰めたとか噂では聞いているが、どんな風になつていいのか、本当は俺も全然分かっていない」

「……」

た。

「沢をやり始めるとやみつきになるんだよ。夏道を歩くのが馬鹿らしくなる」

一瞬、一瞬が目眩めいていた。忘れていた原始の本能が甦ったようで、爽やかな緑と光の渦に違和感なく溶け込める自分が嬉しかった……。

ヘッドライトの光芒が待合室をなめ、一台の車が駅前の広場に入ってきた。

エンジンが止まると、カーステレオの音楽が漏れ聞こえた。

「田舎のドラ息子だろ」

「そんなに悪い趣味でもないですね」

人気の出はじめた若い女性歌手の歌だ。

月明かりの下で聞く切々とした歌声は胸に沁みいった。床に抜けたシュラフに足を入れ、壁に凭れて透明な歌声に耳を澄ました。

「いいですね」

「……ああ」

街中では味わうことのできない静けさだった。素直に心を聞くことができた。

瞳を閉じ、煙草をくゆらすケンの横顔を青い月の光が洗う。いい顔をしている。——静かで、落ち着いていて、今が、今で充たされている。風景のように穏やかに、この静けさのなかに溶け込んでしまったケン。

「そのパーティがどの程度の実力の者を集めていたかは分からない。が、頂上へ出たことだけは間違いない」

「だから、行けると？」

「そう。ただ、日高の南部の沢は概してひどいが多い。泳がなければならぬ所もある。それに、ザイル持つてきてないだろ。だから自分のことは自分で責任持つ。岩場で滑っても誰も確保してくれる者は居ない」

ケンに連れられて初めての沢登りは、定山溪の白水沢だった。木漏れ陽がキラキラと光る爽やかな夏だった。地下足袋にワラジをつけ、水を浴びながら小さな滝をいくつも越えた。

「シャワークライミングと云うんだよ」

水苔で滑る岩肌に、原始的と思っていたワラジが驚くほどよく効いた。道標も踏み跡もない沢筋を、五万分の一の地図とコンパスだけを頼りに進むべき方向を決める。小さな滝つばは腰まで水に漬かり、大きな滝は藪を漕いで高巻いた。そしていよいよ沢の源頭に立ち、それから夏道までの気の遠くなるような深い松の海の藪漕ぎ……。

沢の中での暮営も忘れたい。適当な平地に早目にテントを張り、流木を集めて盛大な焚き火をした。毛針のついた釣り糸を垂れ、イワナを釣った。塩を振ったイワナを焚き火で焼き、いくらでもある藪をコンソメで味つけして酒の肴にした。灰汁抜きは充分でなかった藪は随分と筋っぽく、美味くはなかったが、それはそれで楽しい思い出となっ

もしかして、知らない人が今の二人を見て、僕もそんな風に自然に見えるのだったら嬉しいのだが……、ふっとそう思った。

言葉も交わさずウイスキーを舐め、煙草を喫った。ゆるやかな、満たされた時間の流れに身を任せ、幽やかな宇宙の鼓動を聞いたような気がした。

しかし、この静寂も長くは続かなかった。ライターの明かりに目をとめたのだろう。何本めかの煙草に火を点けたとき、突然に音楽は止んだ。車のドアを開閉する音が聞こえ、すぐに駅舎の扉が勢いよく開けられた。

「何してんのよ、あんたら」

いきなり懐中電灯に照らされた。

「どこの人さ？」

とげとげしい男の声だった。突然の光の束に目を射貫かれ、僕達に男の姿を握えることはできない。

「今、ローソク点けるから照らすのやめてくれないかな」  
シュラフから足を抜きながらケンが云う。

火が点くと男は明かりを逸らした。ゆっくりと待合室に入ってくる。

「怪しい者じゃないよ。札幌から山登りにやってきたんだ」  
男はベンチに腰を下ろし、ようやく懐中電灯を消した。  
額に刺り込みをいれたリーゼントが崩れかかっている。  
「札幌から？」

いくらか柔い声になっている。

「そう。最終列車で。明日、楽古岳に登るんだ」

「へえー、学生さん？」

「そう」

手に持っていた棒きれを極まり悪そうに脇に置いた。

「飲んでたのか。じゃ、邪魔をしたのはこっちの方だったかな」

「そんなことはない。いい音楽だったよ」

男は笑って煙草に火を点けた。

「どうして明かりを点けなかったの？」

「月明かりで飲むのもいいもんだ。それに、本当はロソクもあまりないもんで……」

男は立ち上がり、事務室の扉をガタピシさせて強引に開けた。懐中電灯の光があちこち走りまわり、しばらくすると待合室に灯りがついた。蜘蛛の巣のかかった裸電球が一つ、しかし、闇に馴れた目には一瞬目も眩まんばかりのまばゆさだった。

「これでロソク消しても大丈夫だろ」

悪い男ではなさそうだ。

「無人駅だから、タイマーで点けてるんだ」

「時間がずれてたの？」

「そう。昼に点いて夜消えるんじゃシャレにもならない……」

ベンチに腰をおろし、新しい煙草に火を点ける。

「おどろかして悪かった。時々高校生がつまらぬ遊びをしたりするもんでな」

「いや、いいんだ。地元の人かい」

「うん、そうだ」

立ち去るきっかけがつかめないのか男は気ぜわしく煙草をふかす。

「口に合うかどうか分からんけど、飲むかい？」

ケンがウイスキーをすすめた。

「うん、悪いな……。連れが入るんだが呼んでもいいかな」

「よびなよ。あまりないけど何とかなるだろう」

「女だ。アルコールは駄目なんだ」

女が来た。若い娘だ。小柄で小太り、チェックのミニスカートの蛇腹の通った白いストッキング、ベッタングの靴を履いている。スカートからはみ出た太めの太股がやけにナマナマしく、滑稽でもあった。

「リチコって云うんだ」

女は小さく笑って頭を下げた。いかにも健康そうな丸顔の頬に濃い目の紅をさし、大通り公園あたりで見かけるアイビー姉ちゃんに少しもヒケをとらない。

「札幌から山登りに来たんだってさ。大丈夫、見られてない」

「えっ。何を？」と、これはケン。

意味ありそうに二人は顔を見合わせた。

「こちら辺はイナカだからさ、ほら、そういう、何つーかホテルみたいなものはないんだよ。だから……」

きまり悪そうに男は笑う。

「何だ、そういうことか。俺達は音楽を聴きながら珍しく

センチな気分になっていたけれど、そのあいだそつちの方じゃ……。それじゃ、棒きれを持ってでも追い払いたくなるわな」

「ま、そういうことだ」

寝袋を片づけ、錆びついたストーブを囲んでベンチに腰をおろした。学食から失敬してきたドンブリにウイスキーを注いで男に渡した。器といえば、あとは小さなコッヘルが一つあるだけだ。

けっこういける口らしい。あつという間に注いだ分を空にした。躊躇する様子も見せず我々が直飲みした水筒に口をつけ、うまそうに追い水を飲む。

「さっきまでチーズがあつたんだが……」

男にウイスキーを注ぎながらケンが云う。

「もつとも、敵のはえてる何年か前のものだけだ」

男は笑った。つられて女も笑う。

「彼女に悪いな。何にもなくて」

「ううん。あたしはいいの。もう胸がいっぱい」

「おいおい、何だかイミシンだぞ」

男がチャリをいれ、我々は笑った。気付いて女も笑う。恥ずかしがる様子もなく、あつげらんとしていているのが好ましい。

思いついてザツクを探った。乾し肉があるはずだった。山の中で、最後の最後に取り出してケンを喜ばせようと隠し持ってきたものだ。

「悪いな。大事な食い物まで出させちゃって」

うまそうに齧りつく男の様子に悪い気はしない。  
「楽古岳って云つたら上杵臼から入るのかい？」  
「そうだ。直下から流れ出す沢、〇〇川を詰めるつもりなんだ」

「上杵臼か、あそこはだいたいぶ離農して、もう廃村寸前だ。」

「分校があつたけど、何年も前に廃校になつていいる」

「車は通る？」

「木材運搬のトラックが入っているようだけど、どんなもんだか分からんなあ。車つかまらなかつたらどうするのよ」

「歩く」

「歩く？ 一日はかかるぞ」

「いつもそうしている」

「へえー」

乾し肉をむしりとりに口に入れる。

「……もの好きなんだな。俺には分からん」

「女の娘を好きになるっていうほどには、はつきりした理由はないだろうな。ただ、のめり込むと女より悪い」

「……」

「いくら好きになつても何も返ってくるものがない。いつまでたつても片想い。——水遠の片想い、そんなもんだな」  
思いがけず、ケンの山に対する考えの一端が披瀝された恰好だ。

「むずかしい話は俺には分からん。でも、まあ、どうやら俺がりチョコを想う程度のもんだ。そういうことだろう」

「そう。そんなもんだ。そして、あんたはそれを手に入れ

た」  
「あんた達は、いつまでたつても手に入れることができない。——俺に云わせると、手に入れられないものを欲しがるのは馬鹿だな」

飲むベースが速い分、男の酔うのも早かった。

女は退屈した様子もみせず、男の傍に座っている。煙草をくわえる連つ葉な仕草がピタリときまり、それが少しも嫌味がなかった。不良がかった娘も、大陸的な風土におくと陰湿さが失せ、真面目な青少年よりかえって健康なものに見えるらしい。

「片想いつて、自分のことばかり考えてる人のことじゃない？」

真赤な口紅のついた吸い殻をストープの上蓋でもみ消しながら女が云った。

「自分の気持ばかり大切に、相手のことを考えてあげないから、だから片想いなよ。——結局、片想いの人って自分を捨てられない人のことじゃない？」

「そうだ、リチコ、いいことを云う。もつと云つてやれ」  
男はすっかりできあがりかけていた。

「うん、まあ、それは云える。それはよく分かっているさ。ただ、片想いの男を、女は迷惑に思うだろうが、山が迷惑にさえ思わない。山はただそこに在る。我々はその廻りで愚かな一人相撲をとっているってことさ」

何だか話の焦点がずれかかってきたことにケンも気付いたらしい。また、たぶん最も仲の良い山仲間にも語ったこ

とのない胸の裡を明かしかけた自分に戸惑ったのかもしれない。山と片想いの話を収束に持つていきかけた。

「さすが、学生さんだ。話がうまい。でも、オロカな一人相撲だとか、そんな云い方は嫌いだな。好きなものは好き、それでいいじゃないか。どうせ、それだけのものなんだ」

人の良い、明解な男だった。自分の力を信じ、自分で自分をひきうける力強い人生、たぶん、失敗しても立ち止まってそれを悔やむようなことはこの男にはないだろう。失敗も成功もそれだけのものさ、荒々しい大地に根ざした骨太の思考が生来身に備っているようだ。

「シンプル・イズ・ベストって言葉があるんだ」

「何だよ、またコムズカシイことを云いだしたな」

「あんたの今の話を聞いていて思い出したんだ。道具でも、考え方も、簡単なものほど一番強いってことさ」

「俺が単純だっていうことかよ」

「例えば、このコッヘル。アルミの洗面器みたいな安物だ。でも、このシンプルさのために食器は勿論、スコップ代わりに穴を掘ったり、雪を掘って雪洞を造ったりと、随分重宝したもんだ」

男は煤に汚れてあちこちへこんだ無惨な姿のコッヘルに目をやった。

「ザックもそうだ。ポケットなんか付いていないただのズンどうの袋だ。だが、これがいいんだ。日帰りの山行から冬山合宿まで、どんな量の荷物でも、押し込めばそれで形ができる。寒いときは足を突っ込んでシュラフカバーにも

なるし、上下逆さに背負えば、本当にうまい具合に怪我人を背負うことができる。何より、ポケットやベルトのやたらに付いたザックでは、見てくれはいいが重い松の藪漕ぎなどとてもできない。ひっかかって身動きとれなくなるんだ」

「俺を鍋や釜と一緒にする気かよ」  
「そういう訳じゃない。そうじゃないが、単純で簡単な造りのものほど応用がきいて壊れにくい、それは分かかって貰えると思う。そして、俺は道具に関してはシンプル・イズ・ベストを実践してきたつもりだが、今のあんたの話を聞いていて、考え方の方はそうでもなかったと反省した訳なんだ」

「アイヌの山旅に憧れるケンの、恐らく本音であつたらう。」

「何だか分からんが、俺はシンプルだ、こういうことだな」  
「そう、そしてベストだ」  
「ベストか、ベストならいいや」  
残り少なくなつたウイスキーを、男が三人のカップに等分に注いだ。時計を見ると零時を回っている。

「悪いな、山の分まで飲んでしまつて」  
「ああ、いいんだ、何とかなるさ」  
「明日、何時に出るんだ？」  
「分からん。一日かけて上梓白まで行ければいいんだ」  
「どっちに下りるのよ？」  
「十勝側、山の向こうだ」  
「何日ぐらいかかるんだ」

「上梓白で一泊、沢の中で一泊、天気良ければ次の日に一気に十勝側まで行つてしまつてもいい」  
「約束はできんが、できたら明日上梓白まで送るよ。期待しないで歩いていってくれ。一本道だから追いつける」  
「もし来れるようだったらウイスキーを頼む」  
「わかった。親父のジョニ黒を持っていく」  
残りのウイスキーを一息に啜り、うまそうに追い水を飲んだ。煙草を口にくわえ、火は点けずに女を促して男は立ちあがった。足もとがふらついた。

「車は？」  
「大丈夫。リチコが運転できる」  
「気をつけてな」  
「ああ、じゃ帰るぜ」  
男は去った。

ケンがストープの上に乗る、ソケットから電球を外した。もとの暗闇が戻った。  
水筒の水を回し飲み、寝袋にもぐり込んだ。  
「いい奴だったな」  
「明日、本当に来てくれますかね？」  
「さあ……」

青い月の光が明日の晴天を約束していた。  
虫の音が聞こえた。そして、すぐにケンの心地良さそうな寝息が聞こえ始めた。

初列車を待つ高校生の声で目が覚めた。二日酔いの頭は重

かった。

特別に二杯分のお湯を沸かし、紅茶を飲んだ。

煙草を喫い、パッキングを済ませると、すぐに僕等は出発した。舗装はすぐに途切れ、のんびりした田舎道を重い頭をかかえて歩いた。

今日の朝メシのメニューは、例によってクスビスケット。だが、口にする気になれなかった。食べる前から甘ったるい粉がモノモノと喉に貼り付く感触が蘇り、何だかあげっぱくなるのだ。

肩にくい込む荷重に耐え、地下足袋のヒタヒタした感触を懐かしいものに思いながらひたすら歩いた。いい天気だ。空は高く、山は青い。

「あれがオムシヤヌブリ、それから十勝岳（十勝連峰の十勝岳とは別）、そして、あれが目指す山、楽古岳だ」

ケンの指し示す楽古岳は南日高連峰の盟主に相応しく、いい形をしてひときわ高く聳えていた。

「二年前、トヨニ岳の山頂から初めてこの山を遠望して、そのとき、いつかこの山に登ってやろう、そう心に決めただ。ピラミッド型の山壁に堅雪が光り、それはいい形をした山だった」

そのときの想い出が胸をよぎったのだろうか、遠い目をしてそう云うのだった。

「ピークを踏むだけなら、上柙白からの夏道もあるにはあるんだ。でも、日高の山はやっぱり沢だ。流を越え、藪を漕ぎ、次に何がでてくるのだろうか、ドキドキして、ワクワクわせるのも面倒なことだ。しかし、これをやっておかないと、後で自分がどこに居るのか全く分からなくなる。

尾根筋や夏道を歩くのであれば、周りの風景や遠くの山頂を目やすとして、自らの位置を割り出すのは案外たやすい。しかし、沢の中ではそうはいかない。両脇を山腹に挟まれ、遠くに目標物を求めることができない。井の中の蛙とかわるところがないのだ。

そんななかで、唯一自らの位置を確認するためのよすがとなるものが枝沢の合流点、そして沢の流れの方向が変わる場所なのだ。

小さな沢は地図上には特に記されていないから、高度二十メートル毎に描かれた等高線のくびれを読み、そこに沢があることを判断する。また、所謂二股とか、出合とか呼ばれる場所では、場合によっては支流の方が本流より水量の多いこともある。こういう所では煙草を一服するくらいのつもりで、時によっては空身で上流を偵察するくらいの慎重な判断が必要だ。

いずれにしろ、大切なのは自分が地図上のどの地点に居るかを常に掴んでおくこと。これを怠ると、とんでもない枝沢に入り込み、登るに登れず、下るに下れず、ニツチもサツチもいかなくなることもある。

いい調子で進んだ。問題は何かもない。しかし、この沢のスケールはどうだろう。水量はそれほど多くはないが、両脇から迫る覆いかぶさるような山塊の圧倒的な迫力には、ほとんど恐怖を覚えさせられる。見上げれば衝立のような

クして、いつも心を研ぎ澄まして登るのがこの山への礼儀だ。だから、〇〇沢を詰めてこの山へ登ったパーティがあるという噂を聞いたときは嬉しかった。俺にもやれる、そう思ったから」

昼に近くの川に降り、薄い雑炊をつくった。とてもパンやビスケットを食べる気になれなかったのだ。

「二人だけだから何とでもなるさ」

温かい雑炊を食べるといくらか元気が出た。せせらぎの音を聞きながら少し昼寝をした。

結局昨日の男は来なかった。五万分の一の地図一枚半を歩き、〇〇沢の取っ付きに着いたのは夜の七時に近かった。テントを張り、寝袋を披けると、もう雑炊を作る元気もなかった。ビスケットとソーセージを水で流し込み、すぐに寝袋にもぐり込んだ。

次の朝、日の出とともに起きた。例によって簡単な食事を済ませ、すぐに僕等は出発した。

最初から、暗い、閉ざされた感じの沢だった。一時間ほど歩いてワラジをつけた。いよいよ水の中を歩かねばならなくなつたのだ。消耗しないように右に左になるべく歩きやすいコースをケンが拾ってくれる。小さな枝沢が合流したり、大きく流れが屈曲する地点では、必ず地図とコンパスを取り出して現在地点を確認する。

荒い呼吸に思考力も落ち、歩き続けていると先へ先へと心がはやる。いちいち地図とコンパスを取り出して突き合

山塊に切り取られた空は遙か遠く、ちぎれた雲の断片が音もなく流れていく。本当にこの沢から抜け出ることができると、とんでもない迷路に入り込み、何か重大な過ちを犯そうとしているのではないか……

白水沢で味わった、山と一体になれたような至福の想い、そんな甘い抒情はここにはない。

一昨日、酔っ払ってケンの語ったこと、その意味を今理解できる。我々は突き放されている。山は象にとりつくノミほどにも我々の存在を感じてはいない。

この山行を通じて僕の心をずっと捉えていたもの、それは征服という想いでも、山を友とするセンチメンタルな旅情でもなかった。畏敬、怖れ、——我々の想像力を打ち砕く大なる絶対者を前にして、真摯に慄く魂の震えだった。その昔、アイヌの人々はすべての自然に神を見たというが、このような手つかずの荒々しい風景を前にすれば、その素朴な信仰を笑うことは誰にもできない。

「こういう沢は恐いんだ。上部にいくほどひどい」

まだ大した流もでていない。ということは、ある程度まで行ったら、沢は一気に稜線まで駆け上がっているということだ。

「二十メートルや、三十メートルの滝ではない。とんでもないのがでてくるぞ」

「巻けますか」

その日我々は上流部の顕著な二股、地図上では、川の流れを示す水色の線が丁度途切れる辺りで幕営した。時間は早かったが谷はいよいよ険悪な相を見せ、これ以上進むとテントを張る平地が見つからなくなる怖れがあった。ピークまで直線距離で二キロ、しかし標高差一千メートル以上を残している。ここからが、いよいよこの沢の核心部ということになるのだろう。明日の苦闘が思いやられるというものであった。

四時の気象状況で、ケンが天気図をとった。低気圧が近づいている。明日の昼前から崩れだすということだった。時間も早かったので盛大な焚き火をした。アルコールが切れているのは残念だったが、砂糖をふんだんに入れた紅茶を飲んだ。時間をかけて雑炊をつくった。残された唯一のタンパク源、コンビーフ入り、味つけはコンソメだ。たらふくメシを食い、煙草を喫い、まだ薄明かりの残るうちに寝袋に入った。うるさいほどの沢の流れの音を聞きながら、二言、三言、ケンと言葉を交わし、すぐに夢の中の人となった。

零時頃小便をしに起きた。星が見えないのが気掛かりだった。心なし、沢の水は減っていた。目覚めると谷は濃い霧に塗り込められていた。一面薄墨を流したように、岩も針葉樹もそれぞれの輪郭を失い、谷は更に陰鬱さを増した。

トルで終わるのか、あるいは百メートル続くのか、まったく見当がつかないのだ。

ザックを捨て、一応直下まで行ってみることにした。恐怖だろうか。近づくにしたがい足が震えた。四六時中耳をつけて離れなかつた沢のせせらぎが、耳鳴りのように遠いものになって、谷は不気味な静寂に支配されていた。

この壁に取りついていて自分想像するだけで、心臓を手掴みされたような息苦しさを覚える。

「まったくこいつは……」  
ぬめりと黒光りするいかにも滑りそうな岩肌を、すっかり水量の乏しくなった水の流れが、白い飛沫をあげながら落ちてくる。黒い岩肌と、乳色の霧の間から、途切れることなく生まれ続ける水の流れに見いつていると、一瞬吸い込まれそうな眩暈に似たものを覚える。

右に左に、登れそうなルートを追ってみるが、ケンはずもかく、僕には無理だ。墜落し、脳髄の飛び散った自らの姿が脳裡をよぎる。

「おい、シロー」  
ケンの声が僕を現実に戻す。少し下がった所で、正面の壁にむかって右側にあたる岩場を指している。

「ここはどうだろう」  
ケンの所まで戻った。

正面の壁より更に傾斜はきつそうだった。しかし、三十メートルほど上がった所で、一旦小さなテラス状になっている。雨が降れば沢筋となるのだろう。三十

「深海にいる魚のようだ」  
ぼつりとケンが云った。

テントを撤去して出発する頃になつても霧は薄れなかつた。

まだ使えそうであったが、新しいワラジに履きかえた。どんな悪場が待っているか分らない。思わぬ不覚を採らぬよう万全を期したのだ。ワラジの紐を丁寧な絞めあげていると、武者震いに似たものが体を走る。何故とも知らず、自分がとても凜凜しいものに思える。

「行こうか」  
いい顔をしたケンが云う。ケンもきつとこんな瞬間が好きなのだ。

左股に入り三十分も歩いた頃だろうか。厚い霧のヴェールを通し、正面に大きな壁が見えてきた。近づくにしたがい、その正体のただならぬ様がいよいよ明らかになってきた。

その壁のどうやら全貌が見渡せる地点で我々はザックを下ろした。霧の切れ間を待って、上の方がどうなっているのか確かめようとするのだが、いっか途切れる気配がない。

そこは三方が岩の壁に囲まれ、暗れていれば陽の光も十分に差し込むけつこうな広さを持つていた。地図の上から見ても、本流は明らかに正面の壁だった。しかし、今見えているエリアだけから判断しても、ここを直登するのは不可能なことと思えた。しかも、それが今見えている五十メー

メートル巾程度のスラブ（一枚岩）状の岩肌が、そこからはいくらか緩やかな傾斜となつて左に回り込むように続いている。

「なんとかいいけそうな気がするんだが」

ケンは冷静だった。何度も修羅場をくぐりぬけているのばせあがり、判断遅滞の状態に逃げ込みかけた僕とは年季が違う。

腰を下ろし、もう少し上部が見えるまで待つことにした。煙草を二、三本も喫っただろうか。一瞬霧が途切れ、上の方が見えた。

スラブ状の岩はそのままの傾斜で——七十度くらいはあるだろうか、七、八十メートルほど上部に続き、左からせり出す築古岳の支稜と思われる尾根筋の陰に回り込んでいく。支稜の尾根の形から判断して、そこまで登りきれば、その先はそれほど傾斜はないように思えた。よく磨かれたスラブだが、水は流れていない。本流である正面の漂れた岩場に比べ、滑る心配は少ない。ただ、その高度感に耐えられるだろうか。見上げていてだけで背筋に震えが走る。登り始めたが最後、絶対に引き返すことはできない。登るより、下る方がはるかに難しいのだ。取り付いたら、何が何でもピークまで登り切つてしまわねば、生きて帰ることはできない。そこまで出れば夏道があるのだ。

「たぶん、北海道電力のパーテイもここを登つたのだと思う。よほどの力量の者が揃つていなければ正面は無理だ」  
覚悟を決めて岩に取り付いた。常に三点確保（両手、両

足四本のうち、三本はいつも岩肌を掴んでいること)を自らに云いきかせた。それとともに、絶対にワラジを介さず岩肌に体重を乗せることがないよう気を配った。

どうしても地下足袋の親指はワラジからはみ出してしまふ。そんな部分で岩に乗っていると、次の足場に移るため伸びあがったとき、あっとい間に滑ってしまう。

ザックを背負い微妙なバランスをとるのは難しい。それでも三十メートルを登り切り、テラスに着いた。骸骨は投げられた。もう戻ることはできない。

テラスから先は支稜の陰に入るまで、足を停めて休めそうな場所はなかった。一息に登り切るしかない。

「下を見るな。俺の辿ったルートをよく覚えておけ。それから、高度感に負けて左右の草つきに入るな」

ケンの云うとおり、スラブの左右には背丈の低い雑木や草が生え、陰鬱なスラブの岩肌と好対照をなしている。草や木がある分、それ等を手がかりにすれば一見安全に登れるような気がする。また、空中に体をむき出しにする岩登りと違い、草や木が幾分高度感を薄めてくれる。だが、実際は岩に取り付くよりはるかに危険だ。

草つきの表土は、かろうじて岩肌にごびりついた饅頭の薄皮のようなものだ。しかも、それが湿っていてよく滑る。草も木も力をかければいとも簡単に根元が抜ける。確実に体重を預けられるものは何一つないのだ。

「行くぞ」

適当な間を置いてケンに続く。

中しろ。

——いや、十メートルと百メートルは違う。雑炊で腹一杯にするのと、ピフテキで腹一杯にするくらいは差はあるぞ。百メートルが恐いのは当たり前だ……。

しかし、そんな雑念に苦しんだのも最初の数分であつたかもしれない。ふと見上げると支稜の裾は近かつた。スラブは幾分傾斜を増してその裾を乗り越え、そこから先斜度を緩め、支稜を巻き込む形でゆるやかに左に回り込んでゆく。

取り付いた時のギクシャクした感じは失せていた。考えるより先に手足が動いた。

右手がホールド(手がかり)を探り、掴み、左足が次のスタンス(足場)を捉え、体重を移す。次に左手が的確に次のホールドを押さえ、続いて右足が次のスタンスに移る。迷うことはなかった。体で考え、体が動いた。当初の喘ぐような息づかいさえ、今は蒸気機関車のプラストのようにリズムカルだ。

いよいよスラブの終端は近い。支稜からせり出す赤茶けた岩肌を巻き込むように登りきると、ようやく両手は岩から開放され、足だけで立つことができた。

先に登りきったケンが静かに僕を見つめている。自分のことより僕のことの方が心配だったのだ。笑顔を作ろうとしたが、たぶんうまくいかなかった。いいんだ、いいんだ、ケンは小さく頷きかえした。

岩はしつかりしていた。足場にする凹凸も、下で想像していたよりしつかりしたもの求めることができる。しかし、次の一步をどうしても見つけられなくて、躊躇するところが間々あった。

動きを止めると押さえつけていた恐怖心が顔をのぞかせる。沢のせせらぎが遠か下の方に聞こえる。谷の底では感じなかった風の音が聞こえる。そして、大きく波打つ自らの心臓の鼓動が……。

岩としての難易度のみを考えるなら、この程度の岩場は何度か経験がある。だが、問題はその高度感だ。チラと目の端でとらえる谷底の水の流れは、濃い霧に霞んで今は蜃気楼のように遠いものに見える。妙に現実感の乏しい景観だ。そして、芋虫のようにへばりついている自分も、一瞬夢の中にいるような錯覚を覚えさせられる。死がすぐ隣にあることが他人事のように思える刹那がある。

——つまらない自意識は捨てろ。登ることに集中しろ。ほら、今掴んでいる岩の出っ張り、そんなことで、もし足が滑ったら、お前は自分の体重を支えられるか?そして、そのへつぱり腰、そんなにへばりついたら十分なフリクション(摩擦)が得られず、却って滑り易いっていうことは重々知っているはずだろう。

やっぱりお前は恐いのだ。その腰の逃げ方が何よりの証拠だ。十メートル落ちて、百メートル落ちて、どうせ死ぬんだ、同じじゃないか。そして、お前は最初の十メートルはうまくやったじゃないか。恐がるな。落ち着け。集

予想していた通り、この支稜沿いに狭い谷が急角度で頂上へ向かって延びている。ナイフで刻んだような鋭いV字谷だ。荒削りな巨石が重畳として谷を埋めている。雨が降ればこの支稜の雨水を一手にひきうけ、谷は泥水で逆巻き、今僕達が登ってきたスラブには壮大な水のアーチが出現することだろう。

ザックを下ろし、息の鎮まるのを待って煙草に火を点けた。心地良い忘我のときから徐々に我に戻る。

「シロー、見ろよ」

スラブに取り付いてから初めてケンの発する言葉であつた。ケンの指す方を見た。

すぐ傍の立ち木に擦り切れた古いワラジがぶら下がっている。初めて目にする人間の営みの痕跡であつた。

「やつらもやっぱりここを行くしかなかったんだ」

「ということは……」

「まぢがいない。これで頂上へ出られる」

僕達は先を急いだ。霧は益々深くなった。この谷で降られることだけは何としても避けなければならぬ。連続して現れる大きな岩の間を、習いたてのテクニクを試しながら快適に高度を稼いだ。

ハンクがかつた(頭上にかぶさってくること)大岩を微妙なバランスで乗り越える。

「シロー、身が軽いな」

上で見ていたケンが声をかける。

嬉しい。こんなしなやかさが俺の肉の内に今まで気付か

れることなく潜んでいたとは……。

一時間もしないで森林限界を越えた。いよいよ頂上は近い。霧が濃く、周囲の状況はつかめないが、もう枝沢に迷い込む心配もない。とにかく登り、登りきった所が頂上だ。谷を埋める岩も小振りなものになり、最後の急角度なガレ場（傘大から人の頭ほどの石が堆積している場所。石は浮いているので草つき同様登り難く危険だ）を岩雪崩を起こさぬよう慎重に登りきると細々とした踏み跡に出た。——十勝側からの夏道だ。そして、ここが、十勝の国と日高を分ける国境稜線だ。

晴れていれば広大な十勝平野が、そしてナイフの刃先のように鋭い日高の山脈が、遙か北の彼方に蜿々と連なるのを望むことができるはずだ。しかし、今は濃いガスに塗り込められ、ともすれば先を行くケンの姿さえ見失いかねない。

立ち停まることもなくケンの後を追う。さすがに息は荒い。久し振りにとらえるやさしい土の感触に、今更のようにあの沢の凄まじさが胸に迫る。

あっけなく三角点に出た。もう、これ以上の高みはない。登らなくていいのだ。ゆっくりとザックを下ろし、ケンと顔を見合わす。

「やったな」

「ええ」

ザックに腰を下ろし、胸の煙草を探る。残念ながら見えるものは何もない。雲の真ただ中に居るのだ。重い乳白

色の粒子が体の中まで滲み入るようであった。

足もとで小さな花弁に露を置き、微かに震える可憐な草花。ようやく彼女達の優しい出迎えに心を開く余裕が戻った。

「あれはエゾツツジ、そしてこれがイワブクロ……」  
花を愛でる趣味は生憎持ちあわせていない。が、ほとんど人に知られることなく小さな生命を燃えたたせるほそやかな風情は、無粋人の心にもいくばくかの感傷をうながす。憧れ続けた遙かなる山脈を自分の目で捉えることはできなかった。かわりに、彼女達の密やかな出迎えを忘れることなく心に留めおこう。

南北百キロメートルに及ぶ長大な山脈、その南端のピークに今俺は立った。ケンの助けなしには成し遂げられない山旅であった。

これ以上何を望もう。思い残すことはない。

煙草を喫い終わると二人で小便をした。ケンは今登ってきた日高側に、そして僕は十勝側。襟袷を挟んで右と左、流れ落ちる方向は違うが、いずれ太平洋で巡り合う運命であった。

あとは、今踏んできた夏道を十勝側に下るばかりだ。もう神経質に地図を読む必要もない。降られても命にかかわることもない。

さようなら、日高の山脈。

さようなら、可憐なる処女たち——。

もう一度、せめて山頂の三角点を瞳に焼きつけ、僕達は日高の峰をあとにした。

雲の下に抜け出して暫く歩くと林道に出た。ケンの口からは陽気なハミングも聞こえる。歩けるだけ歩いて、暗くなったら道の脇にテントを張ればよい。急ぐ旅ではないのだ。山葡萄やコクワの実を探りながらのんびり歩いた。

四時頃にアスファルトの道路に出た。小高い丘の上に出ると、それは定規で引いたように地平線の彼方まで続いている。両脇は灌木に覆われ、人家の現れる気配はまったくない。さすがにこれにはウンザリした。

今まで道路脇に駐められた車は勿論、上ってくる車も見えない。拾われる可能性は皆無ということだ。立派な道路であるだけに余計腹が立つ。

なかばヤケ気味に一時間を歩き、そろそろ今夜の寝ぐらを決めようかという時だった。フォグランプを点した車の上って来るのが見えた。かなりのスピードで飛ばしてくる。どうやらスポーツカータイプで、こんな車を乗りまわす兄ちゃんでは、帰りの道でも拾ってはくれまい。

一瞬期待を持っただけに落胆も大きく、ザックを下ろして道路端にヘタリこんだ。これ以上歩く気力が失せたのだ。水は採れないが、もういいや。今夜は道路の真ん中で寝てやろう……。

僕達の姿に気が付くと、車は更にスピードを上げた。だ

らしくなくザックに凭れかかる二人の横で大きくブレーキを踏んで停車した。フィルムの貼られたウインドウが下ろされると、見覚えのある顔が笑っている。

「よう、山乞食」

「……」

「俺の顔を忘れたかい？」

駅舎に現れたリーゼントの男だった。

「何だよ、すっかりくたびれきって。あの時の元気はどうしたい」

「あんたこそ何だい、こんな所に？」

「約束したろ、ジョニ黒を持ってきたんだ」

言葉どおりウイスキーを持って車から降りた。

「ほら、まず一杯やんなよ」

箱から出してキャップを開ける。手渡されたケンがラッ

パ飲みで一口、そして僕に渡す。  
空きつ腹の胃の腑が悲鳴をあげる。顔をしかめ、苦痛と歡喜に耐える二人を男は笑って見ている。

「よっぽどいい思いをしてきたようだな」

「ああ、思いの丈を上げてきた」

「それはよかった……。約束も果たしたし、じゃ、俺は帰るぜ」

「……!？」

「冗談だよ」

トランクを開け、ザックをしまおうように促す。

「シャツだけでも着替えようか。予備があるんだ」



「どのみち、その匂いはどうにもならんのだろう。同じことだ」

「臭くてしばらく彼女とは使えないぜ」

「軽口はそのくらいにしな。本当においてくぞ」

文字通り命の綱であったがとうにその役目を終え、かろうじて足首に絡み付いているワラジの残骸を始末した。肩に食い込む荷重から解放され、車の人となった。柔らかなシートが心地良い。

手馴れた様子でターンをし、男はアクセルを踏み込んだ。

「あの日、やっぱり車を側溝に落としちゃってな……」

「彼女が運転したんじゃないの？」

「それはそうなんだが、リチコの家から俺の家までは誰が運転するのよ」

「そういうことか。でもよくここが分かったな」

「いろいろ調べたんだ」

「襟裳岬を越えてきたの」

「そうだ」

「百キロはあろうが」

「そんなもんだ」

夜の帳に包まれかけていた。遠めに上げたヘッドライトが、真直ぐに続くアスファルトをどこまでも追いつける。

「もとの駅でいいんだろ。広尾線で帯広に出るより、その方が近いぞ」

「そうして貰うと助かる。それに、待合室の電球外したままにきてきたんだ」

「そうか。今度はタイマーをいじつても点かないな」  
男がカーステレオのスイッチを入れる。あの夜と同じ女性歌手の歌声が流れる。

「いいなあ」

「うん」

ジョニーウォーカーを一口あおり、透きとおった歌声に耳を澄ます。

初めての日高の山旅は終章をむかえようとしている。震えるようにして岩場にへばりついていたのも、今は夢のことのようだ。短い時間のあいだに、すべては美しい想出として昇華されつつあるようだった。

「疲れてるんだろ。寝ろよ」

「うん……あんたは本当にいい奴だな」

「ベストだろ」

ステレオの歌声に男は小さく口笛を重ねる。

闇のなかに、ポツリ、ポツリ、灯りが見えはじめた。そろそろ里は近い――。

—了—

## ●受賞のことば―太田 実



■住 所 群馬県高崎市倉賀野町1867

■本 名 太田 実 本名 実

■生年月日 昭和27年3月17日

■職歴(履歴) 昭和27年 群馬県高崎市に産まれる

昭和51年 北海道大学工学部中退

同 52年 日本国有鉄道大宮保険区入社

平成3年 JF東日本高崎支社退社

同 3年 安田ビルマネジメント株式会社(ビル管理会社)入社

現在に至る

二十年以上も前、悲しい別れ(僕だけが悲しかったのだけれど)をしたことがあります。迷惑そうな彼女の前で精一杯の強がりを行いました。「何年かして思い出すことがあったら手紙をくれ。住所?すぐ分かるさ。きっとその頃は文壇の片隅で、少しは名を売っているから」

と見得を切ったほどには文学に入れ込んできた訳でもありません。むしろ、あの別れの時がそうであったように、実人生の苦しさから逃れる言い訳として文学への憧れがあったのかもしれない。

四十半ばになって文学青年をしているのもお笑い種かもしれませんが。しかし、憧れを忘れずに歩き続けていけば、こんないいこともある。それを教えてくれたのが今回の受賞だと思います。おかげで二十年前の鼻持ちならぬ一言を、ようやく余裕を持って振り返ることができそうです。